

報告④

予防ネットから実践型ネットへ  
——岡山史料ネットの経験——

今  
津  
勝  
紀

- 一 岡山史料ネットスタート
- 二 レスキューの失敗事例
  - (一) 二〇〇〇年の鳥取県西部地震
  - (二) 二〇〇九年の集中豪雨
- 三 東日本大震災後の展開―行政系ネットとの両輪体制―
- 四 二〇一八年の西日本豪雨
- 五 岡山のレスキュー事業のスキーム
- 六 現在の岡山ネットの体制

## 一 岡山史料ネットスタート

史料ネットの活動は既に社会的に認知され、その意義が広く世間に伝わるようになってきました。実は岡山史料ネットは、そういうものがまだ認知されていない段階からスタートしています。そのため、困難もあつたわけですが、そのプロセスを皆さんで共有して、今後の東海資料ネットの活動などに生かしていただけたいと思います。

史料ネットの活動は、一九九五年の阪神淡路大震災がきっかけで始まりました。それ以前には、災害に際して資料を残そうということは、あまり積極的に取り組まれてこなかったわけですが、これに何とか対応していこうということで、当時二〇〇三〇代の若い研究者の皆さんが中心になってスタートしました。その後、日本全国各地で災害が起き、二一世紀に入ってから史料ネット運動も各地で広がりますが、局面が大きく変わったと思うのは東日本大震災です。それで現在に至るといふ状況です。

岡山では、二〇〇〇年の鳥取県西部地震がスタートでした。この地震は、過疎地域で発生したため人的被害などはあまりなかったのを忘れられているかもしれませんが、大きな地震でした。その時に岡山大学のチームをつくって、鳥取大学、島根大学、神戸大学の皆さんと一緒にレスキューをしたのが、私たちの最初のスタートだったわけです。

これは都市部の地震ではなく、中山間地域の人口が減少していく局面にある所の被害でしたので、実は地域社会そのものが壊滅する可能性のある危機的な状況をもたらしました。これは大変印象深いお宅のレスキューの事例です（写真1く2）。建物はトリアージして、被害状況を評価していくわけですが、赤紙を貼っているものはもう

使えないので壊しましょうという判定を受けたものです。この建物の持ち主の方は現地を離れておられ、地震が起きたため戻ってこられたのですが、この建物を壊すことにしたのでしょう。トタン板には「良い思い出がいっぱい詰まっています。さようなら。」と書かれています。これを見て、大変胸が締め付けられる思いがしました。資料がなくなるといいうのは、資料と人というのは共にありますので、人が亡くなることでもあるし、地域社会がなくなることもあります。日本列島で多様な地域社会を維持していくことは大事なことで、あまり都市に集中しない方がいいと思うわけですが、そういう体験をしました。

私自身は、史料ネットの活動をしていても、自分の研究活動にはあまり役に立たない日本古代史の研究者です。こういう所のレスキューをしても、古代史の資料が出てくることはないのです。それでも、地域を考えることは日本人の歩みを考えていく時にすごく大切なことであり、古代の地域史研究にとつても実は重要な意味を持つているのだろうと考えて、こういう活動をしながら研究にフィードバックをしているところです。

この時も、さまざまなレスキュー事例がありました。これは現地の公民館に搬入した、ほとんど生活雑記みたいなものです（写真3〜4）。相当アドレナリンが出ていたのだと思いますが、箱階段まで運んじゃえというので、結構、無茶なこともしました。仮目録も取りながら作業をしました。その中で、襖の裏に古文書が大量にあることを認識して（写真5）、こういうものもちゃんと処理をしないといけないということ、襖の下貼り文書にも注目していきました。島根大学では、今でも搬入した未処理のものが大量に残っています。岡山大学も何点かまだ残っていますが、処理が大変なのです。

## 二 レスキューの失敗事例

### (一) 二〇〇〇年の鳥取県西部地震

せっかく東海ネットが設立されるということですので、今までの失敗の事例を皆さんにお伝えしたいと思います。鳥取県西部地震は、鳥取だけではなく、峠を越えた岡山県側でも被害がありました。県北部の新見市に編入されている千屋という地域でも被害が出ています。岡山県の過疎地域ですが、ブルーシートのかかっているお宅が点々とありました。それらを一軒ずつ回っていくのですが、結局、岡山県側ではレスキューでできたものはありませんでした。「こういうものがあるんですけど、残しましょう」と言っても、なかなか伝わらない。現地の自治体に行き、教育委員会を回って「ピラを配りましょう、こういうものを助けましょう」と言っても、なかなか対応していませんでした。それで、岡山県では大変メジャーな山陽新聞の記者さんに同行取材のうえで記事にしてもらいました(写真6)。史料ネットについての新聞報道が岡山県に流れたのは、これが最初の事例になります。

こういう困難があったかを簡単に言っておきます。文化財保護法によって、現在の日本の文化財保護の枠組みができています。しかし、ご承知のように、バランスよく文化財保護を担当できる職員が配置されている自治体は稀です。埋蔵文化財の職員は結構いたりしますが、文字史料を専門とする人や美術・工芸を専門とする人はほとんどいないこともあり、文化財行政は地方レベル、地域の末端レベルではかなり偏りがあるのが現実だろうと思います。その中で指定されていない未指定の文化財の保護を訴えても、「何を言っただ。無駄な仕事を持つてくるな。」という反応です。今から二〇年前はこれが普通でした。ちなみに二五年前は、文化財等救援委員会へ申し出て協

力は実現しませんでした。そういう大きな高い壁がありました。

それから、物理的・心理的距離もあります。鳥取県西部地震の被災地は、私が居住する岡山市から車で一時間半ぐらいかかってしまいます。すぐにはなかなか行けないという、物理的な問題がありました。また、私自身は東京の生まれで、当時は岡山弁が話せなかつたので、現地の人と上手にコミュニケーションできないのです。岡山県は結構保守的な所でもありますから、いきなり訳の分からない若造が、しかも自分たちの言葉もしゃべれないやつが来てということ、誰にも信用してもらえないということがありました。そういう心理的距離を何とかしていかないと駄目だと思いました。事前に何とかしないとどうにもならないなあということを感じました。

それで、岡山史料ネットが立ち上がることになりました。二〇〇五年に岡山大学の学長がお金を出すと行ってくださいましたので、少し組織だった活動をするようになりました。講演会やセミナー、ワークショップなどを重ねていきました。それから、県内のどこにどういうものがあるかというデータベースを作っていました。これは公表されている資料からピックアップしていきます。何々市の何々家文書にはいつの時代のどういうことが書いてあるのかというデータを全部集めていきます。岡山市についてはこれからです、それ以外のところはかなり網羅したデータベースができてつつあります。

そういうことを重ねていくのですが、災害が起きていない所でこれをやるのは結構、苦しいところがあります。「何でそんなやらなあかんねん」とか「本当に災害なんか来るの?」とか「岡山は『晴れの国』だから何もないからいいじゃん」などと言って、相手にしてもらえないこともあるのです。しかし、特に岡山地方史研究会に集っている研究者や県立記録資料館の研究者などの皆さんと一緒に、ワークショップをやったりして、少しずつ活動を広げていきました。

## (1) 二〇〇九年の集中豪雨

二〇〇五年に岡山史料ネットが正式にスタートした後、二〇〇九年に岡山と兵庫の県境で集中豪雨があり、両県とも水害が発生します。水害がこういう山の中で発生するのかと思います。流木が橋などに引っかけたてがムができてしまうのです。

岡山県では、美作市の江見、土居という所で洪水が発生しています。この時も、現地へ行ってチラシを配ろうと思いい、現地の自治体や教育委員会などに行つて「ピラを全戸配布してもらえないだろうか」とお願いするのですが、なかなか色よい返事をいただけない、対応してもらえない。結局、自分たちで配るしかありませんでした。

峠を越えた兵庫県側の佐用も水害に見舞われたのですが、兵庫県では、神戸の歴史資料ネットワークが一九九五年からずっと地域連携協議会などで活動を重ね、坂江涉さんなどが中心となつて県内のネットワークづくりを一生懸命頑張っていました。そういう活動もあつて、地元の人たちから教育委員会に伝わり、教育委員会の方から歴史資料ネットワークに連絡が行つて、同ネットがレスキューをすることになりました。またもや峠一つ岡山側では何もしなかつたのですが、大変悔しい思いをしました。岡山ではなかなか上手くいかなかったのが現実です。

それでも、その翌年にも史料ネット講演会を開き、瀬戸内市でワークショップを行いました。瀬戸内市は海岸沿いの市ですが、そういう被害が想定できる所でワークショップを重ねていきました。

### 三 東日本大震災後の展開―行政系ネットとの両輪体制―

局面が大きく変わるのが東日本大震災です。これをきつかけに、史料ネットが一気に広がり、現在では全国にこの活動が展開していききました。この流れは恐らく止まることはないと思つていきます。その際、大きな意義を持ったのは、東日本大震災の時の近藤誠一文化庁長官の声明だったと思います(図7)。「指定・未指定を問わず文化財は、我が国はもとより人類が未来にわたつて共有すべき貴重な財産であり、これらを後世に伝えていくことが、現代に生きる私たちの責務です。」と宣言され、大変心強く思いました。

これを受けて、文化庁を中心とした文化財レスキュー事業のスキームが作られますが、そこに史料ネットももちろん入っています(図8)。一九九五年の時にはなかなかうまく動かなかつたのですが、東日本大震災をきつかけにこういう形で展開していくことになりました。そして、これが地方の自治体、県レベルの文化財行政を動かすことになりました。これに影響を受けて、静岡や和歌山、徳島が県レベルでも動くようになります。

岡山県も二〇一四年に「岡山県文化財等救済ネットワーク」を作ります。その前にスタートしている岡山史料ネットとも連携してやりましょうということになるのですが、私たちも、いきなり県北や遠い所の自治体に行つてもなかなか話ができません。そういう時に、県には行政系の連絡網があるので、県内の行政機関との連絡は、このネットワークを使つた方が早いということで、史料ネット活動の強化が見込めます。通称県ネットと呼びますが、この中には、博物館協議会、市町村教委や建築士のグループが含まれます。岡山史料ネットとは、大学の研究室を結節点にし、両輪の体制でやつていこうとなりました(図9)。



そして二〇一八年一月、第四回全国史料ネット研究交流集會を岡山で引き受けて開催いたします（写真10）。ここでは、各地の史料ネットが、災害が起きる前に何が必要で、どういうことをやっておけばいいのかという経験を持ち寄って交流しました。岡山大学で開催してもよかったです、裾野を広げたいこともあり、岡山駅にも近いノートルダム清心女子大学を会場に行いました。そして同年四月、私は山陽新聞に、即応できる協力体制をつくっておきましようとの提言記事を書きます（写真10）。

#### 四 二〇一八年の西日本豪雨

このように一月に研究交流集會をして、四月に提言をしたのですが、なんと、その七月に西日本豪雨の水害が起きたのでした。

水害は七月七、八日に発生しました。ゆるやかな繋がりだけだった予防型の岡山史料ネットもついに実践へと動くことになるのですが、何も組織立ったものはなかったのので、取りあえずツイッターで広く声をかけようということになりました。私たちは、二〇〇〇年ぐらいからメーリングリストなどを使って情報のやり取りをしていたのですが、広く公開するに当たり、ツイッターを初めて作りました。今はホームページもFBもあります。

そして七月一日の山陽新聞に、史料ネットの記事を被災者関連情報の中に出してもらいました。被災地のどこに仮設トイレや風呂があつて、電気がどうのという情報の欄ですが、新聞の編集者に「そろそろ記事にして」と働き掛けたただけなのですが、必ず見られるように紙面の中央に大きく出してもらいました（写真11）。

実際に岡山でどのように機能したかという点、県ネットは機関や自治体、機構などからなるもので、岡山史料ネットはボランティアベースで活動するものとして、その結節点が大学ということによって動いてゆきました。もつとも、関係機関等に入っている皆さんは大抵史料ネットの活動にも参加していますが、一応の線引きが生まれたように思います。

レスキューするのは、古文書だけではなく、民間の資料、公文書類、個人の書画などいろいろあります。元々岡山史料ネットは、大体一年に一回ぐらい集まって、関係者の風通しを良くしておこうとしていただけなのですが、古文書が得意な人、絵画の修復が得意な人、個人の思い出の品々を得意とする人、公的機関で公文書をやる人などが集まっていたので、そういったいろいろな人々の連携がそれなりに実現したことが特徴かと思えます。

## 五 岡山のレスキュー事業のスキーム

最終的にどういうスキームになったかという点、写真12の通りです。二〇一九年七月現在、県内の大学でこの活動に協力しているのは、岡山大学、就実大学、ノートルダム清心女子大学があり、岡山大学はたまたま文明動態学研究センターという組織をつくる計画があつたので、そこにこのプロジェクトを位置づけることとしてバックアップをしています。線の太さは支持の太さでもあります。神戸を事務局とする全国のネットから多大な支援をいただいています。

これは真備の図書館の状況です（写真13）。今回は、津波にやられたわけではなく水害にやられるのですが、実

際にはほとんど汚水によるものです。ですから、大変な臭いがあります。夏の災害なので、すぐに有機物は腐敗する。繊維も溶ける。古文書は、直そうと思っても溶けてしまつて、繊維が絡み合つてしまうような状況です。

これは倉敷市の公文書のレスキューです（写真14）。明治の初めぐらいからの公文書が残っているのですが、岡山の冷蔵会社の協力を得てそちらに入りました。これを仲介したのは県ネットです。奈文研にもお世話になり、奈良の冷蔵会社経由で岡山の冷蔵会社に話をさせていただきました。これは現在、福岡市博の方で解凍処理をしています。

これは個人文書ですが、現在、岡大で処理をしています（写真15）。こういうドロドロの状態です。こちらは公文書です（写真16）。これは個人のもので、写真のレスキューも被災した人たちにとつては、すぐ重要な意味を持つていて、時々思い出など、お家にとつて大事なものがあつたわけです。これをどのようにレスキューできるか、なかなか難しいところです。

岡山大学に入ったものに関しては、ボランティアさんと一緒にやつていきます。洗浄の仕方は汚損した物の状態によつて違ふので、多分ケースバイケースになつてくるのだらうと思ひます。岡山の水害はほぼ汚水と言ひましたが、すぐ強烈な臭いがあるので、アルカリで中和して臭いを消していきます。最初は真水でやつていたのですが、臭いが取れないので、セスキの水溶液を使つたりしました。また、超音波洗浄機で微細な泥を取つたりもしました。女性の使う洗顔器で泥を取ると、結構効きます。その後、岡山では蒸しています。中にバーベキュー用の温度計を差して、温度をモニターしながら、カビの死滅温度になるまで上げていきます（写真18、19）。ボランティアさんは、一カ月に一回ぐらい集まつていただいて作業をしています（写真20）。作業をする場所が問題になるのはどこでもそうですが、岡山大学文明動態研究センター内に部屋を確保しました。

これは、今回のレスキュー例の一つですが、屏風です（写真21〜22）。上がぐちゃぐちゃにやられてしまつて駄目になっています。途方に暮れましたが、地元の人たちが大事にしている、「何とかしたい」と言われるので、最後の碧の岡山史料ネットでやりました。取りあえず大きいモルデナイベに入れて、脱酸素処理をして置いておきました。最終的に、地元の表具師さんが協力して下さり、きれいになりました。駄目な箇所は仕方がないのですけれども、仮巻の状態にして戻せるようになりました。これは、デジタルデータを作つて複製品を作ろうかと考えていますが、取りあえずは写真撮影をして地元にお返しすることになります。

今回被災した地域には、末政川、小田川、高梁川が流れており、その一帯が洪水でやられました。ここに大日庵という村の小さなお堂がありました。このお堂の隣にあるのが「溺死群霊之墓」です。これは明治一三年に洪水で三三人が亡くなつたので作られたものです。こういうものはみんなすっかり忘れていました。高梁川などは何度も洪水でやられているのですが、そういう時に作られたものです。そのお堂の中から仏像が出てきました（写真23〜24）。洪水でお堂が傾いてしまつて、ぶかぶかと浮いていた状態です。夏のすごく暑い時期なので、膠が溶けてすぐばらばらになります。体内は修復に修復を重ねているものでした。美術史の先生によると仏像の一部は院政期のものだそうです（写真25）。しかし院政期のものでも、修復を重ねているから指定文化財にならないのです。それでも村の人たちにとっては大事な意味を持っている仏像なので、これはレスキューすることになりました。毘沙門さんも膠が溶けてばらばらになっています。胎内仏も出てきています。

この大日庵の仏像がどのような経緯でレスキューされたかと言うと、最初に県立博物館の方に話が入りました。県立博物館の学芸員さんが教員だった時に教えていた生徒さんが、この辺のお坊さんだったというつながりがあったのです。そういうつながりが大切ですね。そして、地元の仏師さんの協力により県内で修復することができまし

た。材料費程度の最低限のようですが、その費用は、企業メセナ協議会が立ち上げた「GBFund」（芸術・文化による災害復興支援ファンド）が出してくれました。それをどこが受けるかというと、岡山県が受けるのは事務的に大変ですので、史料ネットで受けましょうということで、岡山史料ネットとGBFundとの契約という形になって、岡山県立博物館、岡山県の文化財課、史料ネット、みんなが連携する形でお金を調達して、最終的に復元することができました。こういった社会活動に貢献したい企業はありますので、そういう所とつながっていくことも大事だと思います。修復した大日如来と毘沙門さんを岡山県立博物館で、七月一七日から八月二五日まで、岡山史料ネットの活動と一緒に特別コーナーをつくって公開しました。地元のお坊さんたちも来てくださいましたが、皆さんに喜んでもらえました。

## 六 現在の岡山ネットの体制

現在、岡山史料ネットは、ボランティアベースの組織とし、機関の方は県ネットということで、お互いに連携しています。一年経って、総会を開きました。会員は年会費一〇〇〇円を払う方とし、岡山史料ネットに賛同して一度でも手伝いに来てくれた方はサポート会員ということにして、現在全部で一三三人ぐらいが動いています。募金や寄付などをいただきますので、その処理を明確にしておこうということで、きちんと事務局を置き、代表・副代表・事務局長・事務局長見習いなど、いろいろなものをつくってやっています。史料ネットのニュースレターも、一号、二号と出しました。それから、岡山史料ネットの活動を少しずつでもきちんと記録に残すため、岡山地方史研究会

の協力を得て、『岡山地方史研究』第一四七号から第一四九号にかけて特集を組むなどの取り組みをしています。

最後に、岡山大学との関わりについても少し触れておこうと思います。「研究」、「教育」、「実践」のうち、研究と教育については大学側が責任を持ち、社会的実践の部分についてはボランティアの皆さんと一緒にやっていくという仕分けをしています。今、大学での研究・教育の成果を社会的に使えるものにしていく、「社会実装」という言葉があるようですが、そういう形でやっています。人間文化研究機構とか全国の史料ネットの事務局のある大学などと連携しながら、教育プログラムも作っています。運営するに当たって、研究・教育の部分は科研費や運営交付金なども入れられるので、そういうもので動かしていきます。ボランティアベースのところについては、全国のネットの募金や会費と会員の寄付で動かしていきます。大学も積極的にこの問題に関わるようになっていきます。岡山大学のSDGsに関する事業の一環に史料ネットの活動を組み込み、大学の人材育成として、災害から地域の歴史・文化を守っていく人を作る、地域にも責任を持つ大学として、大学でオーソライズされるよう取り組んでいるところです。

以上で、私の話は終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

(いまづ・かつのり 岡山史料ネット、岡山大学大学院社会文化科学研究科)



写真1



写真2



写真3



写真4





写真5



写真6



# 東北地方太平洋沖地震被災文化財 の救援と修復に御協力を

(文化庁長官近藤誠一) 2011.4

- 指定・未指定を問わず文化財は、我が国はもとより人類が未来にわたって共有すべき貴重な財産であり、これらを後世に伝えていくことが、現代に生きる私たちの責務です。そのためにもまずやらなければならないことは、今回の地震や津波によって被災した文化財や美術品等を緊急に保全し、今後予想される損壊建物の撤去等に伴う廃棄・散逸あるいは盗難等の被害から防ぐことです。

図 7

東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援事業（文化財レスキュー事業）

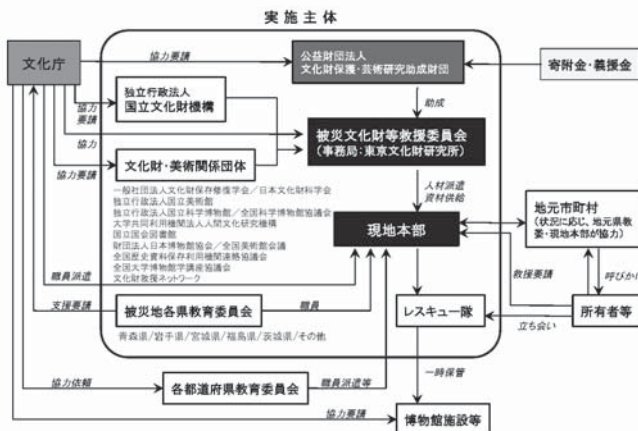


図 8

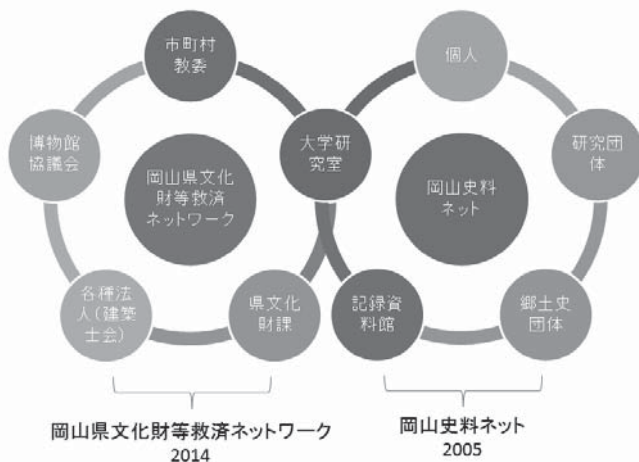


図 9



写真 10



写真 11

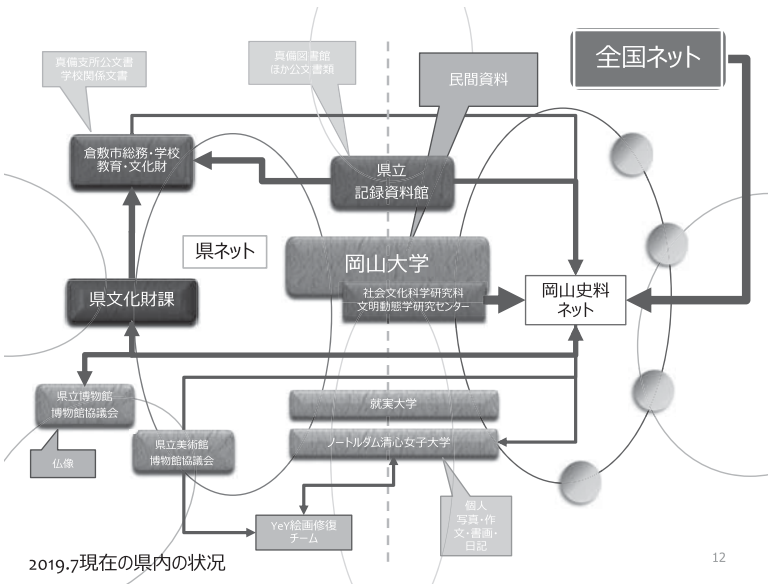


写真 12



真備図書館

公文書類は県立記録資料館  
がレスキュー

写真 13



倉敷市真備支所の公文書レスキュー

冷蔵会社に搬入  
県ネットが調整

写真 14

倉敷市真備町H家  
岡大冷凍、県冷蔵中



写真 15



県立記録資料館での公文  
書レスキュー

写真 16



真備歴史民俗資料館

倉敷I家文書のレスキュー  
I家文書の本体は無事

写真 17



写真 18



写真 19



岡山大学大学院社会文化科学研究科  
文明動態学研究センター

岡山史料ネットによるレスキュー

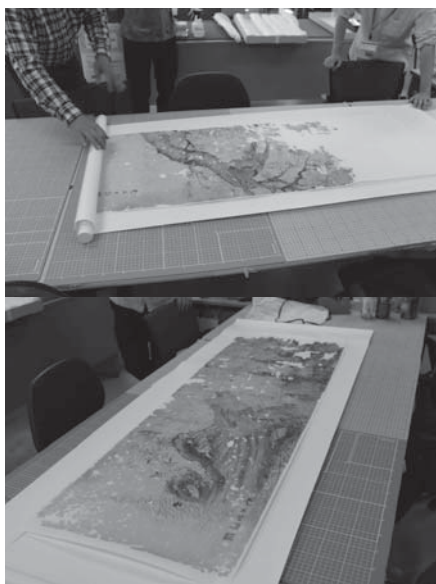


写真 20





写真 21



屏風の絵を剥がし、裏打ちして仮巻に 22

写真 22



中田利枝子氏提供

写真 23



中田利枝子氏提供

写真 24



真備町大日庵の仏像レスキュー、岡山  
県立博物館

岡山県教育庁文化財課—史料ネット—  
博物館の連携、GBFundの支援

25

写真 25